



関西学院同窓会 大阪支部

INTERVIEW

<http://www.kwangaku-osaka.org>

2015.04

探訪記

FILE

No.06

LLCみらい 代表 山田 裕子氏

LLCみらい 代表 山田 裕子氏

「みらいはいついたことを目指す会社なのでしょっか？」

子どもへの虐待を予防し、家族が幸せに暮らすことが出来る——それをサポートするために設立した会社です。同時にサポートする人材を育成するための講座を開いたり、企業さんに出向いて、従業員の「子育て支援」についてお話をさせていたたりもしています。

以前から児童福祉の施設、例えば虐待を受けた子どもが生活をしている施設で働く学生さんたちの指導などもしていたのですが、そこで働く職員の方々の「現状の難しさ」の方がむしろ深刻ではないかという気がしたのがきっかけですね。その難しさには色々なレベルの問題があります。「養護」には関心があっても、「接し方」を追求するという面で



LLCみらい 代表
山田 裕子氏（やまだ・ひろこ）氏

は希薄で、「そんなことは本で読めば良い」と思う方も少なからずあります。その結果、きちっと接するべき接し方を深く理解できずにいる。それが一度に多くの子どもへのケアを……となると問題は深刻ですよね。

まあ、そういった問題をサポートすることを目指して設立した会社ではありません。とはいえ、実際は私一人でやっているものだからやるべきことは次々出てくるもの、なかなか発展しにくいという状況でもあるんです。

スタートしたのは6年前、今から見ればまた社会全体がこういった活動に理解を示してはいませんが、まずは「啓蒙活動」から。ゼロからというよりも、マイナス地点からのスタートだったのではないでしょうか。

——そういった関心の薄さは日本独特の現象ですか？

アメリカ合衆国の研究や政策と比較すれば、日本は30年ほど遅れていると言われていて、日本での一番の問題は、虐待する親というのは「普通ではない」と思っている人が多いということでしょう。自分たち

「普通の人間」が「問題のある人」を守ってあげなくても、そういったことは行政がしているから——まあ、仲間ではないという感覚ですね。これが大変問題としては深刻だと思います。

虐待を受けた子は、好き好んでそういう環境に生まれたわけではないし、そういった子が大きくなって自分が赤ちゃんを生んだ時も、その時は「がんばって育てたい」と心から思っているんです。

でも子どもをどう育てて良いのか、その手がかりが分からないし、周りに手助けしてくれる人もいない。偏見の目もある。周囲も「おいで！教えてあげようよ」という環境は、先ほどの「仲間ではない」的な意識から望めるはずもなく、孤立していきますよね。すると虐待の連鎖が生まれてくる。どこかで助けてあげないと介入してあげること、状況は変わってくるし、そのためのノウハウというのもあるんです。

で、そのノウハウに基づいた家庭訪問事業がアメリカではすでに行われているということも聞いて、毎期ではあったのですが、現地に行つて学びました。そして、それを日本の文化に馴染むようにアレンジをし、啓蒙しているわけです。

——6年間活動されて、啓蒙活動はどのようになっていますか？

現場で働いている方が最先端の考え方に興味を持って勉強に来られたのですが、彼らも「自身の現場」があるので、そこでの実践には活用されても、彼らがさらに広めていく……というところまではいっていないんです。それが偽らざる現状ですね。

——先ほどの子育てにおける「孤立」ですが、具体的にどのような「状態になる」のかを教えてくださいませんか？

ひとりで親で育てるとした場合を考えてみましょうか。誰でも赤ちゃんの意志というのは分からないですよ。何に対して泣いているのか。でも、赤ちゃんは四六時中泣いているでしょ。簡単に想像がつかない

くことはせいぜい「おなかが空いた」「おむつが汚れているくらいです。それらをそのレベル以上に、ある程度細かく「聞き分ける」には、親の方に精神的な余裕が必要になります。

親自身もおなかもすけば、眠たくもなる。でも一人で誰の救いもなければ、赤ちゃんの泣き声を聞き続けると「うるさい」「ええ加減にして！」となりません。そうすると赤ちゃんに触れなくなる、とか投げつけるといつことが起きる。まあ、ふかふかの布団の上にはほんと投げられる子は、普通に沢山のものではないかと思えます。でも、部屋に色々なものがあって、そこにほんと投げつけて、打ち所が悪くて——「こまでの道のりは、全く異常な話ではなく、自然なことだと言えてしまう」

またひとり親ではなく「王支え」があっても、「そんなん放つておけ！」というパートナーだとか、「主人のDVがある場合は「俺のことはせえへんのか！」といった悪い環境もあるでしょう。それでびくびくしていれば赤ちゃんどころではなく、泣かしてはいけないという意識ばかりが来てくる。こういったケースは無償蔵に想定できませんよ。では赤ちゃんとの意思疎通はどのようにすべきなのか：最初のうちは、泣いたら目と目をあわせて、きつちりお話をしながら関わってあげる。これをしてください、という「知識」を育てる人にお伝えします。この関わりが積み重なると、親の中に愛着が生まれ、赤ちゃんの中には「自分は大切な存在だ」という自尊感情が生まれるわけです。

でも一般的な育児書に書かれているような「子育ての知識」には「何時間」「一度授乳してください。おむつは紙のものを使えばいつもサラサラなので、少し放っておいても大丈夫」といったマニュアル的なものを指導することが多いので、「それでいいんだ」と親も思ってしまうんです。賢い人ほどそうやってしまいます。今おっぱいあげました「おむつをかえました」→「30分くらい自分の時間がある」。でも赤ちゃんは泣きます。すると、泣いていても「さっちゃんとしてあるから大丈夫」と思ってしまう。赤ちゃんは泣いても泣いても誰も来なかったら、赤ちゃんはどうなると思います。だんだん泣かなくな

っていくんですよ。

で、一般的には赤ちゃんは「1歳くらいから話し始めます」と育児書などに書かれてありますので、しばらく喋らなくても気にならない。それがよその子の成長を見るにつけ、どうして自分の子は……と気になり始める。1歳の検診で「言葉の遅れ」が顕著になってくる。「お母さん、赤ちゃん」と喋ってました？」と聞かれ「え？赤ちゃんとうそなんなん聞いてない」——核家族が基本となった現代では、こういったケースはごく普通の出来事として起きています。

ミラーニューロンってご存知ですか？親が笑顔で語りかけると、赤ちゃんもそれを返すんです。逆に泣くたびに怖い顔で親がやってくる、その子はあまり

笑わない子になりますね。するとそこからその子の「不幸」が始まる。そこで別の大人が「可愛いね」と言って声かけをしても、きょとんとしている。保育所や幼稚園に行っても、先生になつかない。周りの大人も人間ですので、そういった子を正直には「可愛い」と思えなくなるので、時間とともに溝が出来てきます。するとその子も「自分なんて：大事じゃないんや」という気持ちになる。

「こういう子は、いっぱい関わってあげないとダメなんですよ」ということも専門職の方にお伝えしています。

——**具体的に子育て自体をケアされる場合もあるのでしょうか？**

養護施設を出た人で「家庭訪問を希望する」という方のところに行っています。そこで声かけをする。



「ちゃんと関わってあげているから、赤ちゃんが表情豊かになってきたね」と言いつつお母さんをはげましています。すると

「赤ちゃんが生まれたスタートの時点で、全ての親が持っている大事に育てたい」という思い、それを継続してくれる、そんなサポートですね。

かつて大家族や地域的なコミュニティが確立していた時代にあった親業の指導といったところでしょうか。アメリカでこういった家庭訪問であれば、「必要だ」と判断する場合は、3歳〜5歳くらいまで続けることもありえます。育てる方も安心できますよ。ね。日本の場合も「こんには、赤ちゃん」という制度があります。これは、市町村の担当職員が、「地域内で赤ちゃんが生

まれた家庭には必ず一回は行きましょ」というものなんです。主たる目的は「赤ちゃんの安全を確かめる」こと。比較的認識の進んだ都市では、気になるケースと出会うと、助産師さんたちが週一回行くことになっています。たまたま4カ月経てば終了。その後は養育支援家庭訪問事業というのが、市町村によってはあるのですが：最初に触れ合った助産師さんとは違う人が担当するのが普通です。するとお互い人間同士ですので、合さ合わないといった別の次元でのリスクがそこにでてくる可能性もあります。出来たら同じ人の方が良い。そんな話を行政の方にしますが、「システムとして整えている」の一点張りなので、なかなか本質的な解決にはなりにくいですね。

私の経験してきたケースを概観していきます。例えば若いお母さん：18歳くらい。「出来ちゃった結婚」で、育児の手伝いや家族・地域のフォローな

ど想定できそうにもない環境の人がいるのです。そういう方たちとじっくり語っていくことで、徐々に具体的な変化が見えてくるんです。例えば全て一緒にくたにしていたゴミを分別するようになったり、煙草に使っていたお金をちよつと貯金するようになったり、あるいは忘れていた自分の親との心のふれあいの瞬間を思い出したり……生活のことです。どれも些細なことばかりではありますが、目に見えて変化していく……すると自然と赤ちゃんとの接し方も変わってくるんです。こういったことは、ボランティアでやっていますが、社会づくりの上でもとても大事なところであるのに、システム化できない。大変難しい問題ではあります。社会全体での問題となりにくい——国民レベル、国家レベルでの認識の不足と言わざるを得ないように思います。

Youtubeなどで見ていただければ良いかもしれませんが：アベセタリアン・プロジェクトというのがあります。2000年にノーベル経済学賞を受賞されたジェームス・ヘックマン（米カリフォルニア大学経済学部特別教授）が主導しているものと同じような早期教育のプロジェクトですが、生後6週〜1歳の貧困家庭の乳児を向人かビックアップして、早期に関わってゆくというものです。そうすることで、子どもたちの人生を変えることが出来るのではないか、そんなプロジェクトです。内容的には脳を活性化させる遊びをしていくんですが、それも特殊なものではなく、普通の家庭であればよく買える、昔からあるような普通のおもちや（カラフルな積み木やパズルなど）を使っているんです。ところが、1歳3か月〜5カ月くらいから子どもの認識に大きな変化が出てきた。ここで言いたいことは「勉強」「教育」ではなく、肝心なことは「関わり」だということなんです。

——**このような活動に山田さん自身、身を投じようかと決心された具体的ななきっかけとは何だったのでしょうか？**

最初は心療内科で働いていました。そこで色々なケースを見てみると、「親子の関わりが大きな問題なんだな」と思えることが多かったです。中でも

統合失調症(破瓜型の)若年患者—友達とも関わらないし、勉強もしない。何もやる気がなく、一日「ろっ」としているだけ。無為…まあ、鬱のひどい状態のようですが、そういった患者さんが高い確率で自殺をしたんです。

また拒食症の子も沢山来られました。彼女らに共通して言えることは、子どもは親を必要としているのに、親が忙しくて接することが出来ない。中には子どもと接することが好きではない親もいたりしたのですが、そこに問題があるということに気付かされたんです。

その後、保育士養成をすることに。そこでも虐待を受けた子供をどうサポートするのかという実践的な問題が存在していました。また同じころ、精神科のカウンセリングをするようにもなりました。一般の企業に勤めておられた人で、鬱になられた方などがお越しになられたのですが、がんばって良い会社に入ったのに、結局人間関係がうまく行かず、鬱になるという人がほとんどでしたね。そういった人たちは皆、子供時代に親との関係で苦しんできた—DVがあったり、例えば2歳か3歳の時に、お父さんに階段から突き落とされて、それをお母さんがにこにこしながら見ていた…とか。

これらのケース、その殆どが幼いころの親との関係、全部ここに繋がっていたんです。「ここを何とかしなければ!」という答えに行き着いたんです。それがきっかけですね。

——山田さんと同じような問題意識を持って活動をされている方…日本ではどれくらいおられるのでしょうか。

私の提案するような形で、赤ちゃんが生まれたら、家庭を全戸訪問する、というプロジェクトが大阪の豊能町で去年から行われています。これを「是非やる」と言って下さったのが教育委員会の方だったんです。

その方は、かつては幼稚園や保育所で先生であり、その当時から「ちょっと気になる。親子関係に問題があるのではないかと感じていた子どもが必ずと言っていいほど思春期以降に問題を起す」と言

多いということに気付かれていたんです。「子育ての早い時期に何とかしないと」…その人もそういう問題意識を持っておられました。

全てとは言いませんが、このように比較的規模の小さな町だと、それぞれの顔や背景も見えてくるので、保育の現場におられた方の中には、問題点の本質に気付く人も少なからずいるのではないのでしょうか。ただ、それをどのように専門的に解決の方法として進めてゆくのか…周辺に理解してくれる人がどの程度いるかによっても状況は変わってきます。最初に申し上げた「社会の認識」とも関係してきますね。

——山田さんの活動において、今一番必要とされるものはなんなのでしょうか。経済的な問題でしょうか行政の政策でしょうか。

一緒に活動できるトレーナーですね。その養成…まあ、時間・資金といったところの問題でもありますが、も言えるのですが、とにかく人不足です。トレーナーが潤沢に存在すれば、目に見えて問題は解決されていくでしょうし、社会の認識もかわってゆくと思っています。

大字で講義をとも考えたのですが、先生も学生さんも「国家資格を取得」というところで手いっぱい、簡単に言えば「それどころじゃない」という状況です。

問題の核心は目の前で見えているのに——(二)がもつとも忸怩たる思いでいる部分ですね。

——ありがとうございます。

2015年4月14日

場所：三つみい事務所にて

取材：中野順哉／白石歩

山田 裕子(やまだ・ひろこ)氏
LCCみらい代表

経歴

関西学院大学大学院修士修了(社会福祉)
住友病院心療内科でケースワーカー(P.S.W) 8年。
退職後、専業主婦7年。二人の娘の子育て。
京都府立看護専門学校 保育士養成11年。

所属

CAPSベシヤリスト、NPFアシリテーター、
CSPトレーナー
日本子どもの虐待防止研究会委員
NPO法人 児童虐待防止協会委員

編集後記

「子どもを取り巻く問題は多様ですが、社会からの孤立が悲しい出来事を行っています。虐待の連鎖を断ち切るための対策は、喫緊の課題だと思います。『みらい』の活動を広く知っていただきたいですね。」

編集委員長 小島圭保 (1995年法政大学政治学専攻卒)